



森は海の恋人

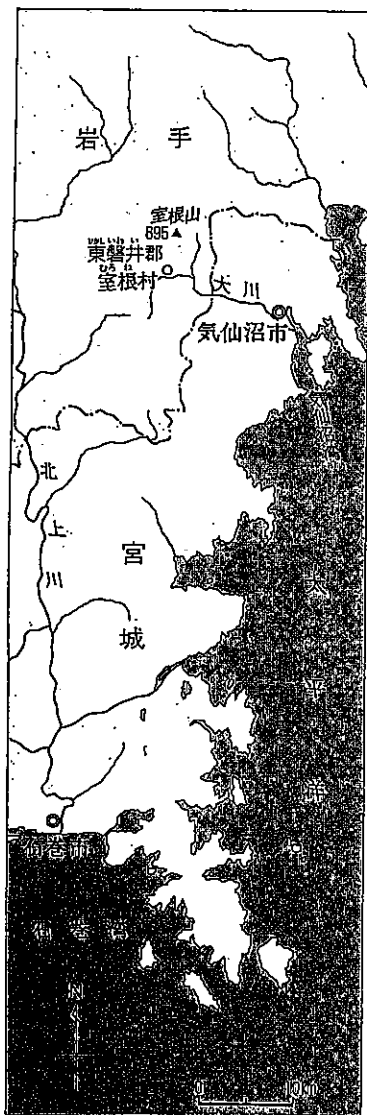
はたけやま しげあつ
島山重篤

① リアス式海岸特有の、波静かな入り江が続く宮城県沿岸は、広島県と並ぶ日本有数の牡蠣の産地である。宮城県がなぜ牡蠣の産地なのかといえは、いかだを浮かべられる静かな湾が多いことによるのはもちろんだが、種牡蠣（牡蠣の稚貝）の世界的産地でもあるからだ。この種牡蠣は、北上川河口の石巻湾で多くとれるので、宮城県と呼ばれている。それは、成長が速く、味もよく、病気に強いという三拍子そろった優良種で、北海道、岩手、三重、岡山など国内はもとより、フランスやアメリカで養殖されている牡蠣も、実は、そのほとんどが宮城県種なのである。気仙沼湾で牡蠣の養殖業を営むわたしも、もちろん宮城県種を用いている。

意外に思われるかもしれないが、あるできごとによって、わたしは、つくづく森のありがたさを感じ、六年前（一九八八年）から、仲間と、気仙沼湾に注ぐ大川上流の室根山に広葉樹を植林し続けている。

それは、一九八四年にフランスへ行った時のできごとがきっかけだった。

地中海に注ぐローヌ川河口のラングドッグ地方、ジロンド川河口のマレンヌ・オレロン地方と、フランスを代表する牡蠣の産地を見学しているうちに、わたしは、しだいに胸が高鳴ってくるのを感じていた。それは、フランス最大の大河、ロワール川河口の大都市ナ





「垂下式」で養殖をする筆者

ントでクライマックスを迎えた。日本では、『垂下式』といって、いかだに牡蠣をつり下げて養殖しているのだが、フランスでは『地蒔き式』といって、干潟[☆]に直接牡蠣を蒔いて育てている。だから、養殖場の見学には潮が引くの見計らって行ったのだが、干潟に降り立った時から、わたしにはある予感がしていた。

潮だまりには、ヤドカリ、カニ、タツノオトシゴ、イソギンチャクなどの小動物が、重なるようにしてうごめいていた。また、この河口では、なんと、シラスウナギ（うなぎの稚魚）が食料にするほどとれていたのである。シベルと呼ばれるシラスウナギのパイ皮包みがナントの名物料理だった。ウナギが群れる川、それは川が健全ななにより証拠である。ロワール川河口の干潟の潮だま

りに群れる小魚や小動物、そしてシラスウナギ。それは、三十五年ほど前の宮城の海そのものであった。わたしは、さらにロワール川の流域も見学して回った。ロワール川上流のトゥール地方東部は、広葉樹の大森林地帯で、プロワの森、リュシーの森、アンボワーズの森、シノンの森といった大森林が広がっている。それらの森からは、十本以上の支流がロワール川に注ぎこみ、水郷地帯を形づくっており、ロワール川は海へと注ぎこんでいる。それまで外海から入りこむ沖合[☆]の海水が、牡蠣のえさになる植物プランクトンを育ててくれるものとはばかり、わたしは思っていた。だがフランスで見た光景は、全く違う方向を示唆していた。森と海とはいったいどんな関係にあるのか。わたしはその時から考え始めたのだ。

フランスの「地蒔き式」養殖



海^{しよ}の食物連鎖^{じゆつれんさ}は、植物プランクトン^②の発生から始まり、動物プランクトン、イワシ、サバ、……と続く。だから、植物プランクトンは海の生物生産にとって、底辺を支える最も大事な生物ということになる。では、植物プランクトンの成長に必要な養分はどこから運ばれてくるのだろうか。太田川^{おくだ}が注ぐ広島、北上川河口の宮城、ミシシッピー川河口のニューオリンズ、ジロンド川河口のマレンヌーオレロンなど、牡蠣の産地は必ず河口である。これは、川が植物プランクトンを育てる養分を運んできていることを示しているのではないだろうか。

だが、川が養分を運んできてくるといふことだけで、森と海との関係をとらえることができないのか。こうした問題は、不思議なことに学問の世界では手つかずの状態であった。しかしわたしは、そのメカニズムを解明しようとしている研究者にめぐり会うことができた。その人は、北海道大学水産学部^{まづな}の松永勝彦^{まつながかつひこ}教授である。

教授の研究を要約するとこうである。

植物プランクトンは、基本的には二酸化炭素、水、太陽の光で増えるが、そのほかにチッソ、リンなどの養分が必要である。特にチッソは、タンパク質をつくるのに欠かすことができない養分である。ところが、植物プランクトンは、先に鉄を体内に入れておかな

いと、チッソを取りこめない構造になっている。さらに鉄は、クロロフィルなどの光合成色素の生成に深くかかわっているというのだ。

では、鉄はどこから、どのように供給されているのだろうか。

沿岸域の鉄の供給源は森である。鉄が海に届くには水に溶けなければならない。ここで森の腐葉土^{くわ}が重要な役割を担っている。腐葉土は、それ自体植物にとって最良の肥料であるが、山の岩石や土に含まれている鉄を水に溶かし、植物プランクトンが吸収しやすい形に変える役目をしているというのである。

一九九三、九四年、松永教授らによって気仙沼湾の生物生産と湾に注ぐ大川との関係が調査された。その結果、湾の生物をはぐくむ養分の半分以上が、大川によってもたらされていることが判明した。

一九八九年九月に、海から遠く離れた室根山には、時ならぬ大漁旗が何百枚とひるがえった。

山に大漁旗とは意外な光景であるが、それは、森に対する漁民の切なる感謝の表れで、森、川、海、と続く自然の中てしか生きられないことを悟った気仙沼湾の養殖漁民たちの



気仙沼湾の養殖漁民による植林風景

植林風景だったのである。そこには、保水力があり、良質の腐葉土がでけるブナ、ミズキなどの落葉広葉樹が植えられた。植林は毎年続けられ、今ではその数も八千本を超えた。その地は「牡蠣の森」と命名されている。

漁民による植林がきっかけとなり、上流の森の民と下流の海の民との交流が深まっていった。上流の室根村の人たちは、大川の土手の草を年二回刈るが、今までは「雨が降ったら流れるからいいさ」と土手の内側に放置しておいた草を、「今年からは片づけるようにしました。」と言う。子供たちから「朝シャンで使うシャンプーの量を半分にしました。」という便りなども続々と届いた。室根村の人々は、なるべく農薬を使わない環境保全型農業に取り組み、漁民自身も海を汚さないよう注意するようになってきた。そのためばかりでもないと思うが、うれしいことが起こり始めた。二十五年ほど前から姿を消していたメバルが、気仙沼湾に再び姿を見せるようになってきたのである。

森が海に寄せる思いを、森の歌人、熊谷龍子くまがいのうこさんはこううたっている。

森は海を 海は森を恋こいながら 悠久よりの愛紡つむぎゆく

森の民と海の民との交流がさらに深まり、きっと今年も美味な牡蠣がとれることだろう。

①リアス式海岸：出入りの複雑な海岸線を持ち、入り江や湾に恵まれた海岸。
 ②植物フランクトン：藻類など、クロロフィル（葉緑素）のはたらきによって光合成を行う海中の浮遊生物。



筆者 畠山重篤 一九四三—— 中国の上海で生まれた。牡蠣養殖業。

著書に『森は海の恋人』『リアスの海辺から』などがある。

出典 本書のために書きおろしたものである。

認識を深めるために

人間は大昔から、自然の恵みを受けながら生きてきました。二十一世紀においても、このことは変わっていないといえるでしょう。

『森は海の恋人』には、畠山さんの、海を愛し、人一倍の探究心をもって自分の仕事に取り組む姿が描かれています。海に生きる彼が、「行動する人」として山に一本一本植林して

ゆく、その姿に、人は大きな感動を覚えます。その感動が、多くの人を動かし、人の交流を生み出していったのです。その後の畠山さんたちの活動は、テレビや新聞でも盛んに取り上げられています。

畠山さんは、さらにその後、『リアスの海辺から』という本を書きました。ここでは、漁民による植林活動がまちがっていないことをスペインで確認する筆者、畠山さんの元氣

な姿がうかがえます。「リアス」の語源をたどって行き着いた、スペインのガリシア地方で、彼は「森は海のおふくろ」という地元の言葉に出会ったりもします。

畠山さんの行ったような、自然をいっくしみ守っていかうとする活動は、全国各地で見ることが出来ます。その様子を描いた本を三冊紹介します。

ブナの原生林をこよなく愛し、守るための活動を展開した人たちがいます。『白神山地』(鈴木喜代春 著) という本の中には、世界最大級のブナ原生林をかかえる白神山地に貴重な植物を見つけた人が、その喜びを「白神山地通信」を発行することで伝えていこうとする姿が記録されています。やがてこの活動

は、白神山地の自然のすばらしさを広く伝え、守っていく活動に発展していきました。そして一九九〇年、白神山地は「世界遺産」に登録されたのです。

『尾瀬をまもる人々』(後藤允 著) という本は、親子三代にわたって尾瀬の自然と向き合ってきた、平野さんたちの話です。この本では、自然を守ることが、わたしたちにとってどのような意味をもつのが語られています。その一節を引用しましょう。「今、人々(は)『地球環境』について学び始め、そして一個の人間として何ができるか、動き始めている。一人一人の小さな力でも『地球環境』により役割を果たすことができる。」

必ずしも「守る」ことだけが「地球環境」

について学ぶ方法とはかぎりません。守りきれなかった自然からも、人は学ぶことができののです。『一本の樹からはじまった』（土岐小百合 著）は、開発のために切られた一本のケヤキの木の話です。この木は、初めは捨てられるはずでした。しかし、人々の思いが、この木に「新しい生命」を吹きこみます。多くの人の手によって、いすになったり、彫刻作品になったりしたのです。そうして一本の

ケヤキの木から作られたたくさん作品は、再び、全国から東京に戻ってきました。その展覧会は、「一本の樹から地球へ」と名づけられました。そこにはまた、「人の輪」もできあがっていたのです。
さて、皆さんは、自然や環境というテーマなら、どんなことに関心がありますか。自分なりの問題意識をもって、本を選び、読みを広げましょう。

新出漢字と用例

86	湾	湾曲・港湾
86	殖	養殖・利殖 殖やす
88	瀉	干瀉
89	沖	沖合
91	腐	腐葉土 腐る
93	刈	草刈り

88	干瀉(ひ)
89	水郷地帯(ゴウ)
94	盛ん(さかん)

